

人文学・社会科学特別委員会（2026年7月17日）説明資料

人文学・社会科学のDX化に向けた研究開発事業

（データ基盤の開発に向けたデジタル・ヒューマニティーズ・コンソーシアムの運営：DiHuCo）

中間報告

- 1 AI for Science の追い風を受けて
- 2 DiHuCo事業の実績と現状
- 3 事業実績等の詳細
- 4 総括と令和8年度に向けた展望



人間文化研究機構 堀 浩一 / キム・ボヨン



1 AI for Science の追い風を受けて

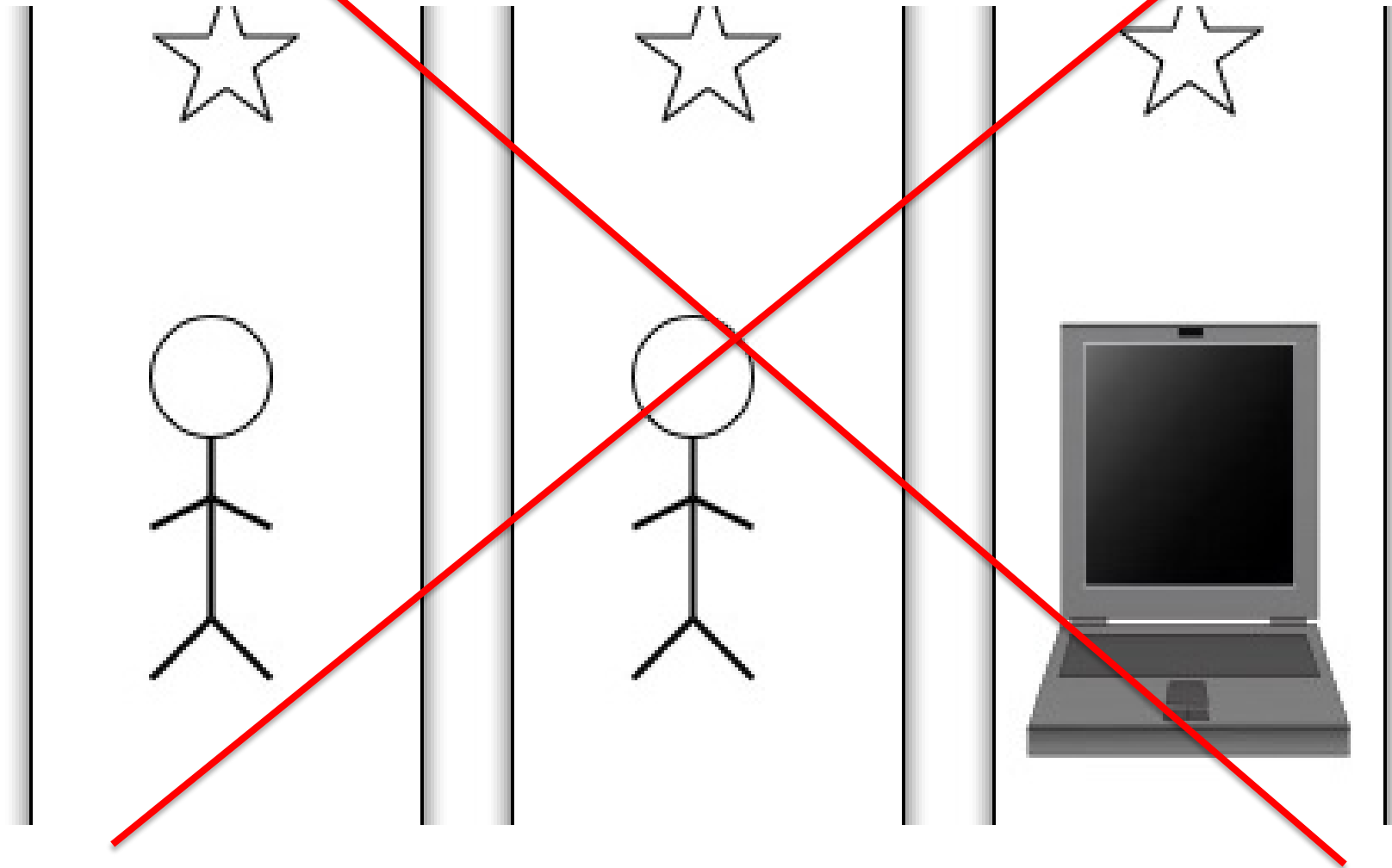
そもそも、人工知能とは？

松尾豊、中島秀之、西田豊明、溝口理一郎、長尾真、
堀浩一、浅田稔、松原仁、武田英明、池上高志、山口高平、
山川宏、栗原聡：

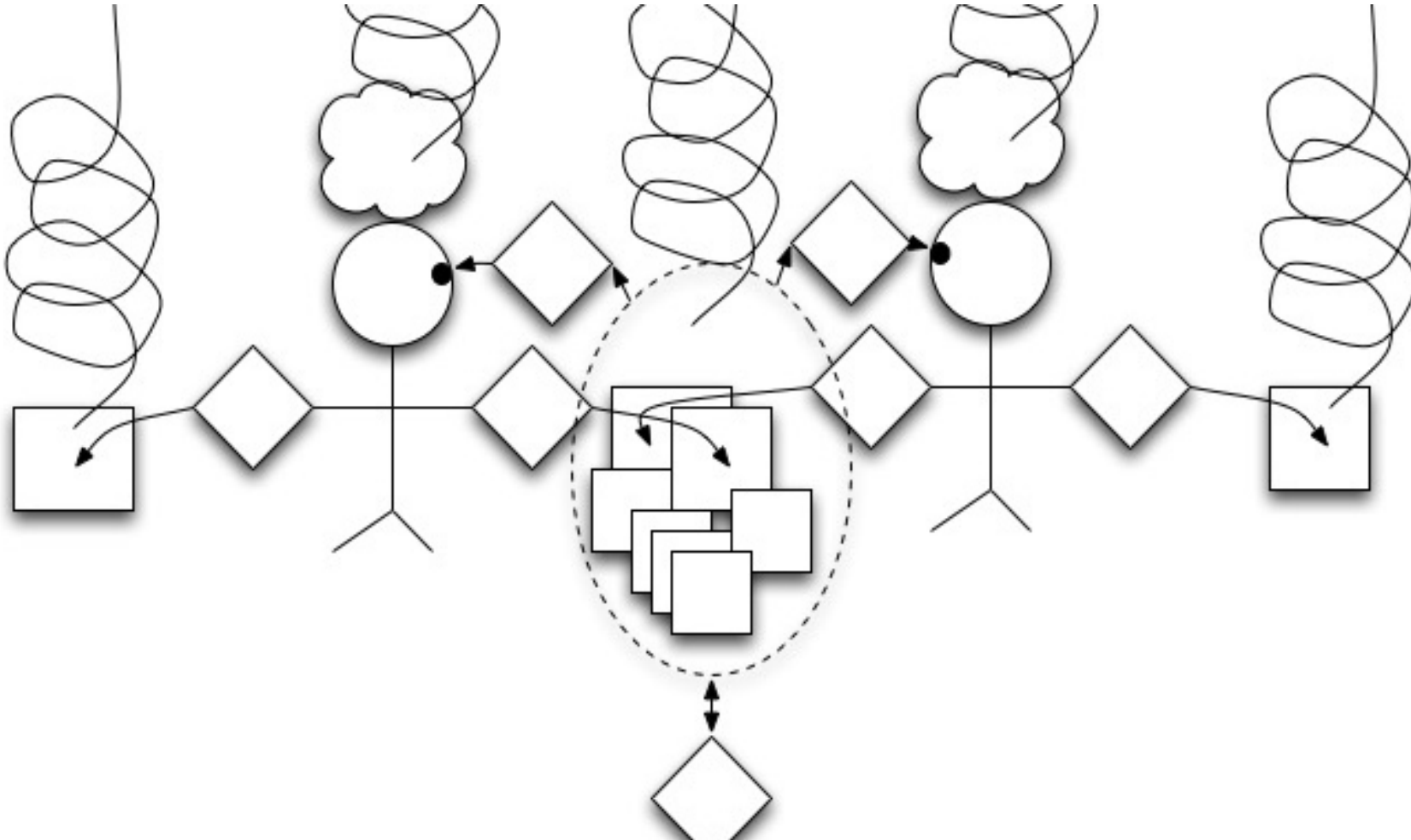
「人工知能とは」
近代科学社、2016.

という本において、堀らは、次の2枚のスライドのような
解説を書いていた。

AI as a human substitute



AI technologies embedded ubiquitously (Intelligence Amplifiers)



人工知能学会設立 40 周年 にあたっての提言(2026年6月15日) より

- 人工知能学会は、人間の尊厳，文化の多様性，社会の持続可能性を重視し、人とAIが共生する社会の実現に向けて、以下の4つの柱を提言する。
- AIは「人間に取って代わる存在」ではなく、「人間の知性と創造性を拡張し社会の持続可能性を支える技術」である。

従来の人文学

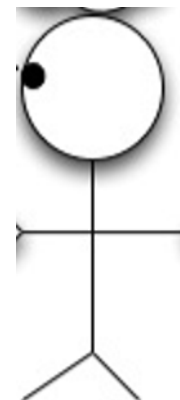
人間の尊厳
文化の多様性



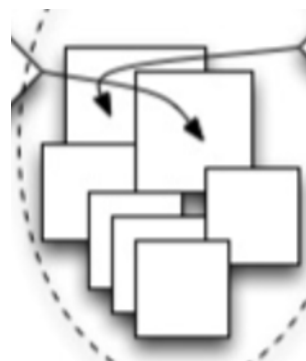
価値観
世界観



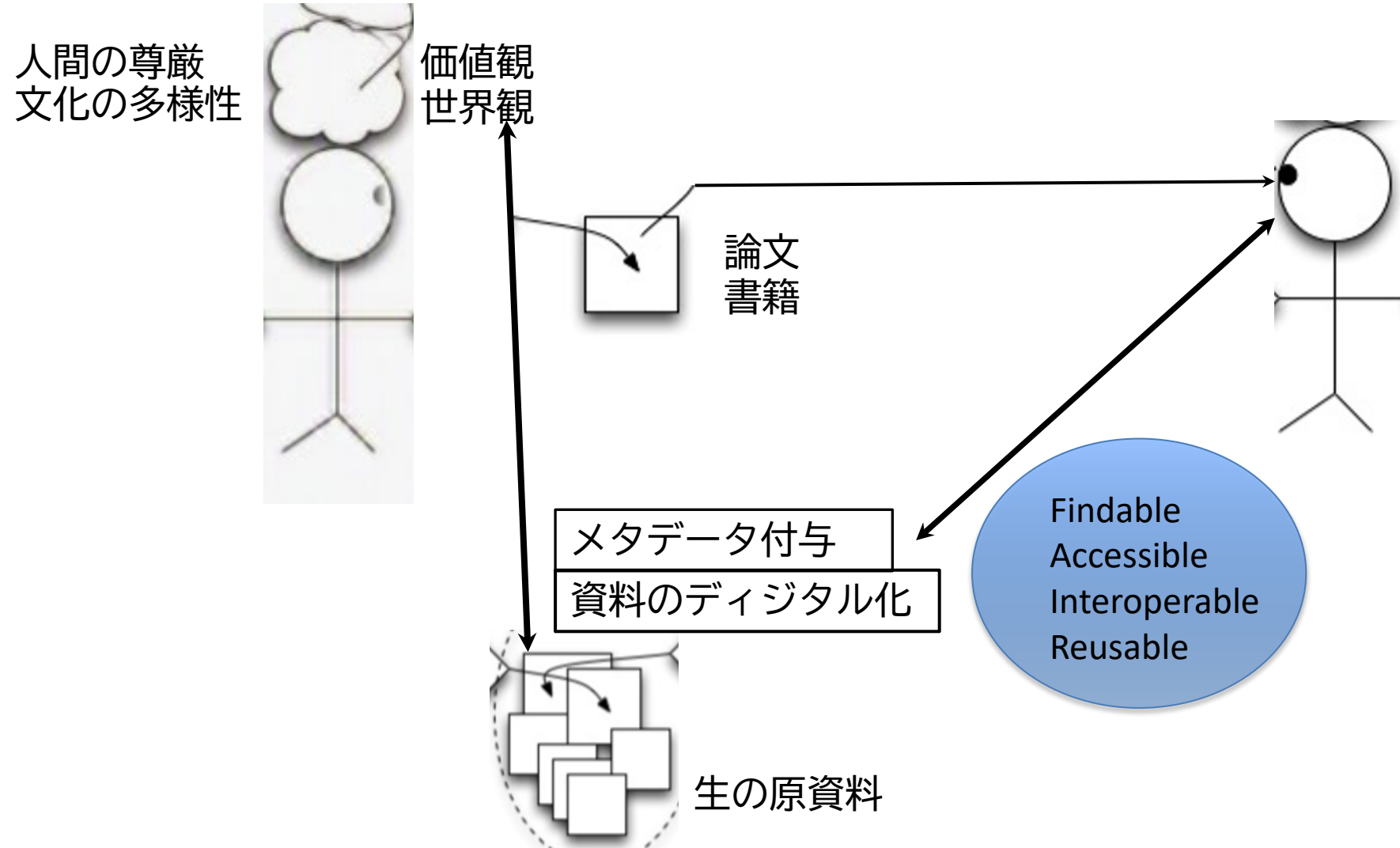
論文
書籍



生の原資料



Digital Humanities



DHコンソーシアム事業

- **メタデータをどうやって付与し、どう使う？**

日本独自のテキストや地理地誌情報

→ メタデータ活用ガイドライン

- **どうやって、Digitalize, Find, Access, Interoperate, and Reuse？**

→ DH人材育成 教育カリキュラム

現在の生成AI



正倉院文書に、「二日酔いで休みます」という欠勤届が残っているんだって？

はい、そういう資料が正倉院文書にあります。当時はお酒に寛容だったようですね。
(うそ、まちがい、ハルシネーション)

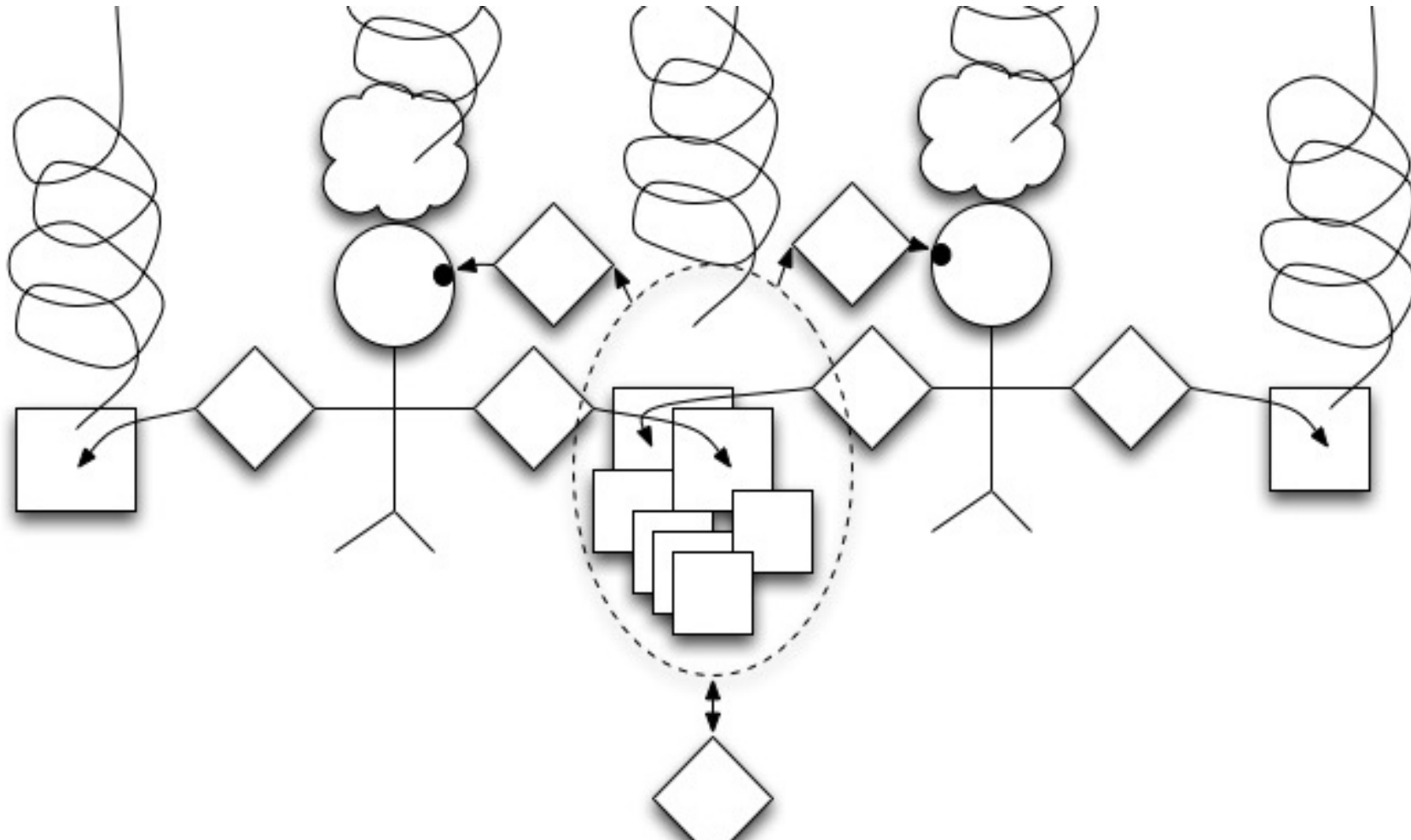
その典拠を教えて

これこれこういう資料があります。
(でっちあげ)



ネット上の
(ゴミ)情報

DH + AI



DHによって

- 同じあるいは近接分野の研究者どうしにおいて、価値観の世界と資料世界との関係を他者が検証し、さらに独自の世界を展開していくことができる。
- 遠く離れた分野の研究者どうしが、メタデータおよびデジタル化した資料とを介してつながり、分野を超えて新たな研究が生まれる。
- 一般市民に信頼できる情報を提供できる。

さらに、DH + AI によって

- 研究データの公開、検証、活用が、さらに容易になる。
たとえば、DHの技を活用する方法をAIの技を使ってガイドすることによって、DHに苦手意識を持っていた研究者たちもDHの成果を活用できるようになる。
- 異なる専門分野の専門家どうしが、さらにつながりやすくなる。
たとえば、異なる分野のメタデータの間のマッピングにAIの技を使う。
- 一般の市民も、さらに信頼できる情報に基づいて思考できるようになる。
たとえば、DHで提供される情報を、一般市民むけにAIの技を使って翻訳する。

課題

- 権利処理
- 倫理
- 研究データマネジメント
- データの長期保存
- ストレージの確保
- 巨大AI企業に依存しないsmall AI networkの構築
- 人のネットワーク、組織間のネットワーク

2 DiHuCo事業の実績と現状



事業の目的・概要

国際標準規格に準拠した人文学DX基盤の構築

- 日本全体の人文学DX・DH推進の中心的機能を担う体制として、コンソーシアム（体制図は次ページ）を設立・拡充。
- 東アジア独自のテキスト・地理空間資料を対象に、TEI等の国際標準規格に準拠したデータ構造化ガイドラインを策定。
- DHを推進できる人材育成のための教育プログラム・オンデマンド動画を作成。ワークショップを開催。

コンソーシアム運営

人間文化研究機構
（中核機関）

研究基盤ハブ

慶應義塾
（連携機関）

研究実践ハブ

情報・システム研究機構
（連携機関）

人材育成ハブ

人間文化研究機構
（中核機関）

23

参加組織数（目標15）

2

国際標準ガイドライン公開

72

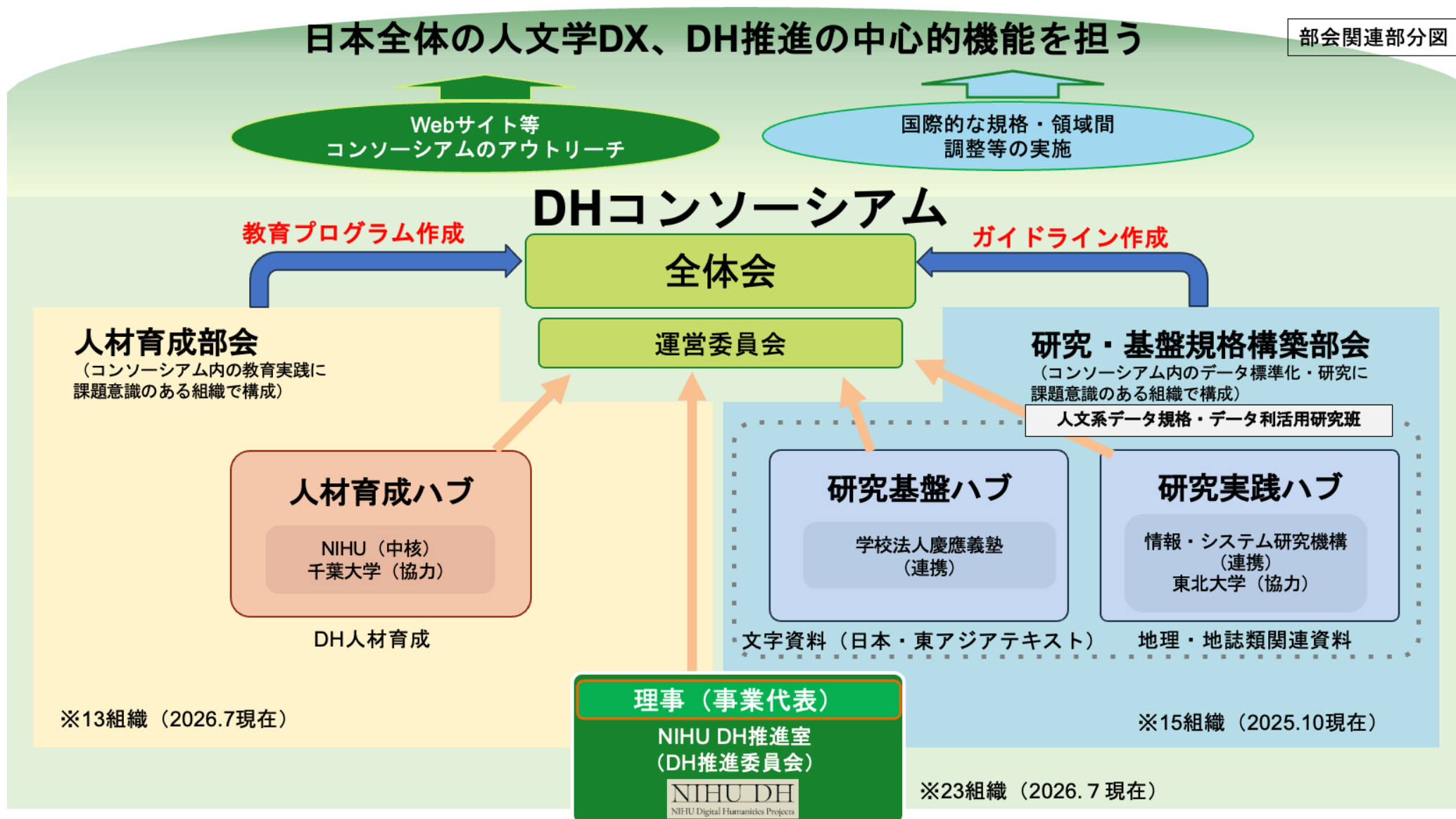
育成イベント参加者
（のべ人数）

371

成果シンポ参加者数
（のべ人数）



コンソーシアム組織体制





KPI達成状況サマリー

主要KPIはすべて達成・達成見込み

指標	評価
コンソーシアム参加組織（目標15機関）	達成（23組織・153%）
ユースケース創出：研究会・学会発表（目標10件）	達成（10件）
海外組織との連携協定（目標1件）	達成（EAJRS MOU締結）
オンデマンド動画作成（目標7本）	達成（7本）
人材育成イベント参加者（目標のべ50名）	達成（のべ72名）
モデルガイドライン活用機関（目標3機関）	進行中
成果シンポジウム参加者（目標のべ300名）	達成（のべ371名）



重要成果物

本事業の中核をなす3つの成果物

①

東アジア・日本語テキスト データ構造化ガイドライン

TEI準拠。古典籍の翻刻・注記・校異
等を体系的に整理し、Web公開

②

DiHuCo-GEOガイドライン

地図・地名・地誌データの活用ガイ
ドライン。試作版サイトを検証中
(近日中に公開予定)

③

人材育成プログラムモデル

DH倫理・基礎・実装のコア科目と応
用科目からなる体系的教育モデル

重要成果物①

東アジア・日本語テキストデータ構造化ガイドライン

- DH研究を促進する「背景」から、日本語資料を対象とした具体的な「事例」「手法」までを一気通貫でわかりやすく解説
- 国際標準規格TEIに準拠し、東アジア典籍の本文構造・翻刻・注記・校異・ルビ・割注割書・漢文訓読等の記述方法を体系的に整理
- 第一版をWeb公開済み。あわせて実践的な「人文学テキストデータ構造化の手引き」も作成・公開

人文学テキストデータ構造化の手引き

teikemdrupaladmin が 水, 14月 2026 - 00:46 に投稿

本ガイドラインを踏まえたテキストデータ構造化のための手引きです。具体的な手法の確認など、適宜ご利用ください。

[各章解説付き目次はこちら](#)

- [T-1. 構造的なテキストデータ構築の背景](#)
- [T-2. デジタル翻刻における課題](#)
- [T-3. 構造化テキストの様々な記述方法](#)
- [T-4. テキストデータ構造化とTEI](#)
- [T-5. 構造化テキストの作成 ―基礎演習1―](#)
- [T-6. 構造化テキストの作成 ―基礎演習2―](#)
- [T-7. 構造化テキストの作成 ―基礎演習3―](#)
- [T-8. 構造化テキストの活用手法](#)
- [T-9. 構造化テキストの作成手法 ―画像リンク編―](#)
- [T-10. 校訂テキストを含む学術編集版の構造化](#)
- [T-11. TEIと辞書 ―東アジア古辞書を例として―](#)
- [T-12. 談話資料の構造化](#)
- [T-13. TEI実践を研究として位置づける](#)
- [T-14. オープンな学術情報流通を支えるテキストデータ構造化](#)

「人文学テキストデータ構造化の手引き」公開ページ

teikem.kemco.keio.ac.jp/eajguidelines/

令和6年度公開 → 令和7年度：第一版として本公開



重要成果物②

DiHuCo-GEOガイドライン

- 研究実践の経験を備えた研究者から、執筆負担を抑えつつ知識を引き出す仕組みとして開発
- 講演資料があれば生成AI（Claude）が構造化記事を自動生成するワークフローを確立。地理・地名分野に留まらず他分野にも応用可能な汎用性の高い仕組み
- 地図・地名・地誌データの活用に関するユースケース・ベストプラクティスをガイドライン内に集約
- 静的サイトジェネレータHugoによる試作版サイトを構築し、18本のAI生成記事で検証を実施
- 「藩IDデータセット」「江戸街道データセット」等、既に公開済みの実データ基盤を持つ

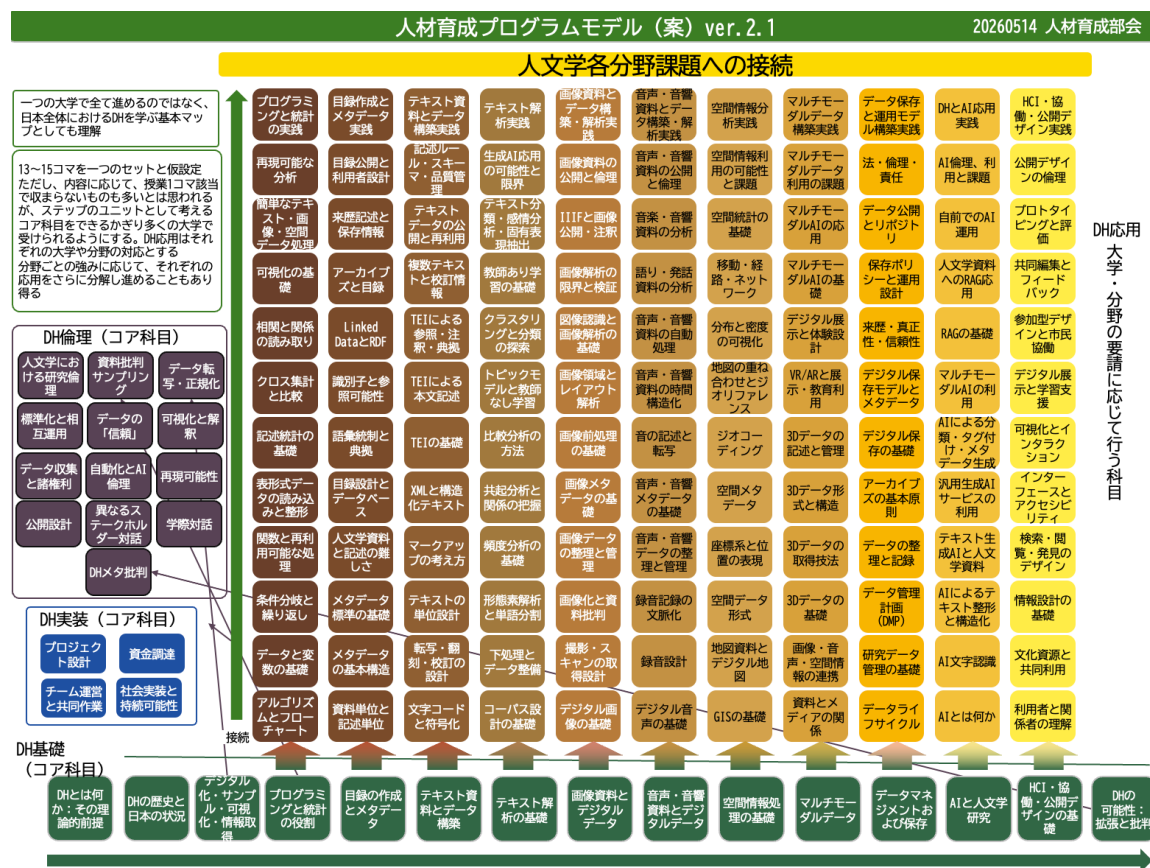


DiHuCo-GEOガイドライン（試作版サイト）

重要成果物③

人材育成プログラムモデル（案）

DH教育の全体像をひと目で把握できる「マップ」として作成。DH倫理・基礎・実装の3分野をコア科目とし、各大学・分野の応用科目へと接続する体系的な教育モデルを策定した。



学習者にとって

学ぶべき科目と全体のつながりが一目でわかり、体系的な学習計画が立てられる。

大学（教育機関）にとって

学内の他部門と連携する際の具体的な材料として活用可能。

社会的意義

日本におけるDH研究の全体像を可視化する役割を果たす。

令和8年度の取組

2カ年で構築した基盤を土台に、コンソーシアムのさらなる拡充と実装の本格化を進める。

コンソーシアムのさらなる拡充

2025年度の18組織から2026年7月時点で23組織へ拡大。
日本全体の人文学DX・DH推進を担う中核的な連携体制としての機能をさらに強化。

教育プログラムの実装

策定した人材育成プログラムモデルに基づき、基礎科目
14本のオンデマンド動画作成を本格化。

テキストデータ構造化ガイドラインの活用

東アジア・日本語テキストデータ構造化ガイドラインの
ユースケース開発と全国展開による、人文DXの基盤構築。

DiHuCo-GEOガイドラインの本格構築

試作版での検証を踏まえ、DiHuCo-GEOガイドラインの
本格システムを構築。

3 事業実績等の詳細

● アウトプット指標

コンソーシアムの参加組織とWebサイトでの活動発信

コンソーシアムの参加組織（オブザーバー含む）

目標：15機関以上

令和6年度

18組織



令和7年度

21組織



令和8年度

23組織（令和8年7月現在）

達成（153%）

Webサイトでの活動発信・イベント

目標：年1回以上

令和6年度

- DiHuCoホームページ公開
- 活動記録を随時掲載・公開
- トピックス記事掲載（2件）
- リーフレット（第1版）掲載

令和7年度

- 活動記録を発信する「あゆみ」ページの制作
- 英語サイト公開
- トピックス記事掲載（1件）
- リーフレット（第2版）掲載

達成見込み

● アウトプット指標

データ利活用研究のユースケース創出：研究会・学会発表

目標 3年間で10件以上

達成

評価・実績：目標達成。令和6年度：5件、令和7年度：5件（計10件）

令和6年度（計5件）

- ケンブリッジ大学デジタル・ヒューマニティーズ部門のセミナーにて発表（1件）（2025年1月15日）
- 東北大学と「第1回研究実践ハブ研究会」を開催（1件）（2025年1月24日）
- 情報処理学会（CH研究会）において、東アジアテキストのためのデータモデル、および黄表紙の構造化に関する共同発表（2件）を実施（2025年2月8日）
- キックオフ国際シンポジウム終了後に技術講習会（小規模研究会）を開催（1件）（2025年3月1日）

令和7年度（計5件）

- 情報処理学会CH研究会にて、東アジアテキストのためのデータモデルおよび黄表紙の構造化に関する共同発表（2件）を実施（2025年5月17日）
- 東北大学と「第2回研究実践ハブ研究会」を開催（1件）（2025年7月4日）
- 日本近世文学会国際研究集会（ケンブリッジ大学）にて成果を広く公表（1件）（2025年9月）
- 「じんもんこん2025」にて成果を公表・発表、ポスターセッションにおいて国内シラバス調査・分析の成果発表を実施（1件）（2025年12月14日）

アウトプット指標

東アジア独自規格の国際検討・海外連携

目標 国際会議への毎年度参画／海外組織との連携協定：3年間で1件以上

達成見込み／達成

実績

- 【国際会議参画】 目標達成予定（毎年度DHおよびTEI年次大会に参画を継続中）
- 【連携協定】 初年度（令和6年度）に目標達成

資料公開促進に資する体制構築のため、2025年3月に中核機関である人間文化研究機構と日本資料専門家欧州協会（EAJRS）との間で覚書（MOU）を締結（2025年4月1日発効）

関連実績（令和7年度）：締結した連携を具現化するプレイベントとして、2025年9月9日にドイツ・ハイデルベルク大学にてTEIセミナーおよびTEIワークショップを共同開催し、海外での研究者ネットワークを強固にした。

アウトプット指標

人材育成プログラムの構築

目標 オンデマンド動画：3年間で7以上／大学等講座プログラム：2回以上／教育カリキュラムマップ：最終年度までに作成

達成／達成見込み

実績

- 【オンデマンド動画】 目標達成（計7本）

令和6年度にワークショップを基にした記録動画3本、令和7年度にワークショップの記録動画4本を作成。さらに、今後14本以上を作成する予定。

- 【大学等講座プログラム】 目標達成見込み（千葉大学における実施調整中）

- 【教育カリキュラムマップ】 前倒しで素案化完了

● アウトカム指標

モデルガイドラインを用いたデータ利用機関等数

目標 3機関以上

進行中

実績

- 目標達成に向けて、具体的なシステムへの実装およびデータ構築のフェーズが進行中。
- 研究基盤ハブにおいて、九州大学を訪問してデータ活用方法に関する対面での研究打ち合わせ（2026年2月4日、3月10日）を重ねている。
- 研究実践ハブにおいて、研究実践構築・公開した地理情報モデルガイドラインの成果が、株式会社**MIERUNE**が運用する現代デザインの歴史地図サイト「れきちず」へと取り込まれ、民間サービス上でデータが直接活用されている。
- 研究実践ハブにおいて、写真アプリ「メモリーグラフ」を改良した。写真という地誌情報と地理情報をアプリによって統合できる。
- 研究実践ハブにおいて、旧東京市**15区**住所データセットを公開し、明治末期の東京の住所を緯度経度に変換可能にした。これに基づき、関東大震災被災者マップを構築した。

アウトカム指標

海外連携・人材育成・成果シンポジウムの実績

人材育成イベントへの参加者数

目標：3年間でのべ50名以上

令和6年度、令和7年度：のべ72名

TEIワークショップ（東京：5名）、Omeka・IIFワークショップ（大阪大学：28名）、TEIセミナー・ワークショップ（ハイデルベルク大学：39名）等

達成

成果シンポジウムの参加者数

目標：3年間でのべ300名以上

令和6年度、令和7年度：のべ371名

キックオフ国際シンポジウム：87名／シンポジウム「人文学のためのテキストデータ構造化の現状と課題」：72名／国際シンポジウム「東アジア/日本における人文学向けテキストデータ構造化のためのガイドライン策定に向けて」：124名／「人文学のためのテキスト構造化ワークショップ」：88名

達成

3-1 デジタル・ヒューマニティーズ・コンソーシアムの設立及び運営

人間文化研究機構（中核機関）

コンソーシアム運営を総括する事務局として、活動基盤の整備、情報発信、および組織間調整を統括。

● コンソーシアム構築・運営

a. デジタル・ヒューマニティーズ・コンソーシアム参画組織 (2026年7月現在)

- 大阪大学大学院人文学研究科人文学林
- 大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
- お茶の水女子大学共創工学部文化情報工学科
- 関西大学アジア・オープン・リサーチセンター
- 九州大学大学院人文情報連係学府
- 京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター人文知連携拠点
- 京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター
- 慶應義塾大学文学部人文社会学科図書館・情報学系図書館・情報学専攻
- 慶應義塾ミュージアム・commons
- 情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設人文学オープンデータ共同利用センター
- 人文情報学研究所人文情報学研究部門
- 千葉大学卓越大学院プログラム「アジアユーラシア・グローバルリーダー養成のための臨床人文学教育プログラム」
- 筑波大学デジタルヒューマニティーズ・リサーチユニット
- 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター人文情報学部門
- 東京大学史料編纂所附属前近代日本史情報国際センター
- 同志社大学文化情報学部
- 東北大学国際連携推進機構統合日本学センター
- 名古屋大学デジタル人文社会科学研究推進センター
- 人間文化研究機構人間文化研究創発センター
- 立命館大学アート・リサーチセンター日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点
- 早稲田大学文学学術院総合人文科学研究センター「デジタル人文学の理論と実践」部門
- 早稲田大学文学学術院デジタル人文学プログラム準備委員会（オブザーバー）

※ 五十音順、23組織



コンソーシアム構築・運営

b. コンソーシアム情報発信のための体制整備・発信

令和6年度

- 英語略称を「DiHuCo」と決定し、ロゴマークと事業紹介リーフレット（第一版）を作成。
- 2025年3月に人間文化研究機構内に本事業の特設サイト（日本語）を構築。
- 連携2機関でもそれぞれ事業用ウェブサイトを開示、普及・啓発を開始。
- 2025年3月1日にキックオフ国際シンポジウムをオンライン併用で開催、87名が参加。
- TEI技術委員長のElisa Eileen Beshero-Bondar氏を招聘して講演動画を一般公開。
- 終了後には技術講習会（小規模研究会）を開催（9名参加）。
- 2025年3月にアジア研究協会年次会合（AAS2025、米国コロンバス）にブース出展し広報を実施。

令和7年度

- 特設サイトを随時更新するとともに、2026年3月に新たに英語ページを開設。
- 日本語版リーフレットを更新（第二版）して全国の大学等に送付したほか、英語版リーフレットも新規作成。
- 2025年12月仏教学とデジタル・ヒューマニティーズ国際シンポジウム「DX-AI時代における人文学の意義と研究基盤の構築」にてポスター発表を実施
- 2026年3月にバンクーバーにて開催されたアジア研究協会年次会合（AAS2026）にブース出展し広報を実施。

コンソーシアム構築・運営：広報物

事業紹介リーフレット（日本語版・英語版）

（日本語版リーフレット）



日本語版リーフレット（第2版）

（英語版リーフレット）



英語版リーフレット（新規制作）

いずれもDiHuCoのロゴマーク・ブランドカラーを用いて制作。日本語版は第2版へ更新し全国の大学等に送付、英語版は令和7年度に新規制作した。

3 - 2 研究基盤ハブ

慶應義塾（連携機関）

日本語を含む東アジアの文字資料を対象に、国際標準規格である「TEI（Text Encoding Initiative）」に準拠したデータ構造化ガイドラインの策定とユースケースの実装を担当。

a. 文字資料を用いた東アジアテキストに関わる国際規格標準ガイドラインの構築

令和6年度

- 日本伝来の古典籍に関する部分について「暫定版ガイドライン」を作成。
- 東京、大阪、福岡、沖縄のほか、海外（ソウル、ケンブリッジ）の公開セミナー等で解説を実施。
- 国内のTEIデータ規格実施状況の基礎調査を開始。
- 若手研究者らの協力を得て、近世文学や日本思想などの各種古典籍を対象に構造化データ構築の事例作成に着手。

令和7年度

- 古典籍の本文構造、翻刻、注記、校異、ルビ、割注・割書、漢文訓読、IIIF画像との対応付け等に関するTEI/XML記述方法を整理・解説した「東アジア・日本語テキストデータ構造化ガイドライン第一版」をウェブ上に一般公開（URL: teikem.kemco.keio.ac.jp/eajguidelines/）。
- ガイドラインにあわせて、「人文学テキストデータ構造化の手引き」を作成・公開。
- 日本語資料・東アジア資料を対象としたTEI準拠データ作成の現状と課題の整理を実施。

「人文学テキストデータ構造化の手引き」公開

人文学テキストデータ構造化の手引き

teikemdrupaladmin が 水, 14月 2026 - 00:46 に投稿

本ガイドラインを踏まえたテキストデータ構造化のための手引きです。具体的な手法の確認など、適宜ご利用ください。

[各章解説付き目次はこちら](#)

- [T-1. 構造的な テキストデータ構築 の背景](#)
- [T-2. デジタル翻刻 における課題](#)
- [T-3. 構造化テキストの 様々な記述方法](#)
- [T-4. テキストデータ 構造化 とTEI](#)
- [T-5. 構造化テキスト の作成 ―基礎演習1―](#)
- [T-6. 構造化テキストの作成 ―基礎演習2―](#)
- [T-7. 構造化テキスト の作成 ―基礎演習3―](#)
- [T-8. 構造化テキストの 活用手法](#)
- [T-9. 構造化テキストの 作成手法 ―画像リンク編―](#)
- [T-10. 校訂テキスト を含む 学術編集版の 構造化](#)
- [T-11. TEI と辞書 ― 東アジア古辞書を例として―](#)
- [T-12. 談話資料の構造化](#)
- [T-13. TEI 実践を 研究として 位置づける](#)
- [T-14. オープンな 学術情報流通を 支える テキストデータ構造化](#)



手引きの公開内容 (teikem.kemco.keio.ac.jp/eajguidelines/index.php/tutorials)

b. 国際標準ガイドラインを用いたユースケース創出のための研究

令和6年度

- 「TEI古典籍ビューワ」に対し、策定データモデルの成果の一部を反映した機能追加の実装を実施。
- TEIに準拠したデジタル図書館システムを運用するケンブリッジ大学図書館を訪問調査し、同館のプラットフォームへの実装を前提とした設計に着手。

令和7年度

- ガイドラインに沿って作成されたユースケースをウェブ上に整理・公開。
- 『Dottrina Christiana』中国語訳、般若心経、勝鬘經義疏（校訂テキストの事例）、『帥記』（歴史史料）、『通一声女暫』『全交法師常々艸』（注釈）、『忠臣蔵即席料理』等の黄表紙資料（画像リンク）、『走れメロス』（固有表現構造化）など多岐にわたる実践例。
- モデルに対応した「TEI古典籍ビューワ」を拡張し、ウェブ上で一般公開。
- 成果を情報処理学会（CH研究会、じんもんこん2025）、日本近世文学会国際研究集会（ケンブリッジ大学）等で広く公表。

c. テキスト国際規格ガイドラインとユースケース創出のための検討会の実施

令和6年度

- 九州大学で活用方法に関する対面研究打ち合わせ（2月4日、3月10日）を重ねたほか、他研究機関とも随時打ち合わせを実施。
- 2025年3月25日に慶應義塾大学にて、10名が登壇するシンポジウム「人文学のためのテキストデータ構造化の現状と課題」を開催。（参加72名）

令和7年度

- 2025年9月13日、ガイドラインの在り方を検討する国際シンポジウム「東アジア/日本における人文学向けテキストデータ構造化のためのガイドライン策定に向けて」を慶應義塾大学で開催。（対面68名、オンライン56名、計124名が参加）
- 2026年3月21日にはガイドラインと手引きを議論する「人文学のためのテキスト構造化ワークショップ」を開催。（対面15名、オンライン73名、計88名が参加）

d. シンポジウム等での発表／国内外における資料情報調査

令和6年度

- ケンブリッジ大学デジタル・ヒューマニティーズ部門のセミナーにおいて、事業の概要と今後の展開等について発表。（2025年1月15日）
- 情報処理学会（CH研究会）において、東アジアテキストのためのデータモデル、および黄表紙の構造化に関する2件の共同発表を実施。（2025年2月8日）

令和7年度

- 情報処理学会CH研究会にて、東アジアテキストのためのデータモデルおよび黄表紙の構造化に関する共同発表（2件）を実施。（2025年5月17日）
- 日本近世文学会国際研究集会（ケンブリッジ大学）にて成果を広く公表。（2025年9月）
- 「じんもんこん2025」にて成果を公表・発表、ポスターセッションにおいて国内シラバス調査・分析の成果発表を実施。（2025年12月14日）
- 具体的なユースケース・実践例の構築や国際標準化における資料の状況を把握するため、国内外（東京、大阪、福岡、仙台、およびフランクフルト（ドイツ）、ハイデルベルク（ドイツ）、上海（中国）、バンクーバー（カナダ））のセミナーやシンポジウム等に合わせて各種調査を実施。

3 - 3 研究実践ハブ

情報・システム研究機構（連携機関）

地図・地誌類に関するDX化の課題を「地名」「地図（地理空間）」「地誌（情報空間）」の3テーマに分けて取り組み、地理・地図類を用いたガイドラインの開発を担当。

1. 『日本歴史地名大系』の精度向上／2. 行政区域データ精査

令和6年度

- 位置情報の精度が十分ではない課題に対し、住所ジオコーダー「Jageocoder (ver.2.1.8)」、歴史地名データ、幕末期近世村領域データ、手動推定を組み合わせた独自の位置推定アルゴリズムを考案し、精度向上に着手。
- 現代から江戸時代まで遡及できる識別子（ID）を付与するため、データセットから表記揺れの可能性を自動指摘するプログラムを開発し、全都道府県のデータに適用して精査対象を絞り込んだ。

令和7年度

- jageocoderの解析結果に加え、幕末期近世村データセットの位置情報も参照・比較することで位置精度をさらに改善。
- 人間によるデータ作成と計算機チェックのサイクルを回し、全県分のデータに対する人間による判断・修正を完了。
- 令和8年度にさらにサイクルを回し、全国規模の変遷データセットとして公開する計画。

3. 藩・近世村データセット／4. POI地名データベース

令和6年度

- 江戸時代の村や所属する藩のポリゴンデータ（領域データ）と、『日本歴史地名大系』の識別子を接続する作業を進め、相互参照により両データの誤りを発見・修正する計画を策定。
- 『日本歴史地名大系』の未公開項目（施設等に関する約7万項目）から、歴史研究に有用な古墳・遺跡・城・宗教施設など約3万件強を抽出し、大部分に位置情報を付与。

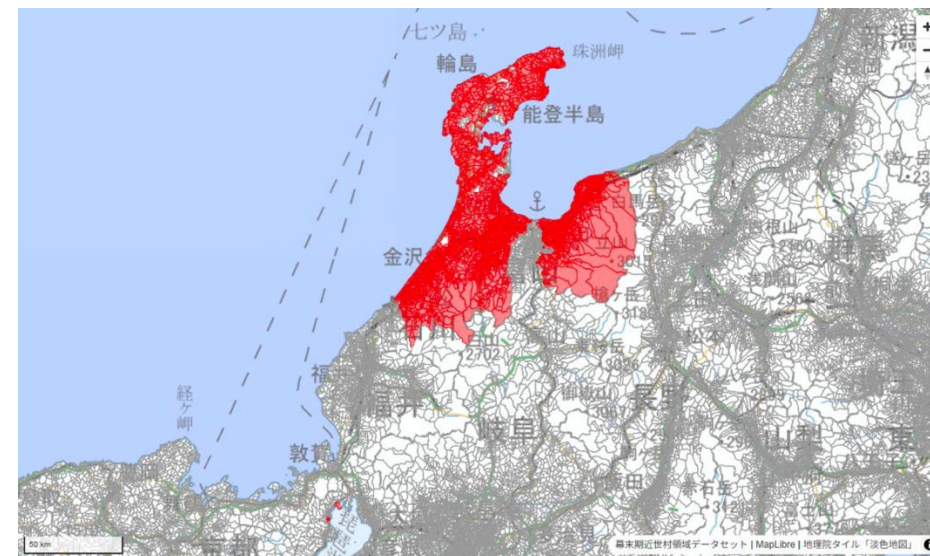
令和7年度

- 408藩を網羅した「藩IDデータセット」を2025年9月に公開。「武鑑全集」や「江戸マップ」の上屋敷・菩提寺情報とリンクさせるユースケースを創出。
- 旧国の識別子を改善した「国・地域IDデータセット」、領分を可視化した「幕末期近世村領域データセット」、地名大系と統合した「江戸近世村統合データセット」をそれぞれ公開。
- 1件ずつ位置情報を精査した上で、2025年5月に『日本歴史地名大系』施設・地点項目データセット（POI）として新規公開。のちにデータ漏れを追加した改良版も追加公開。

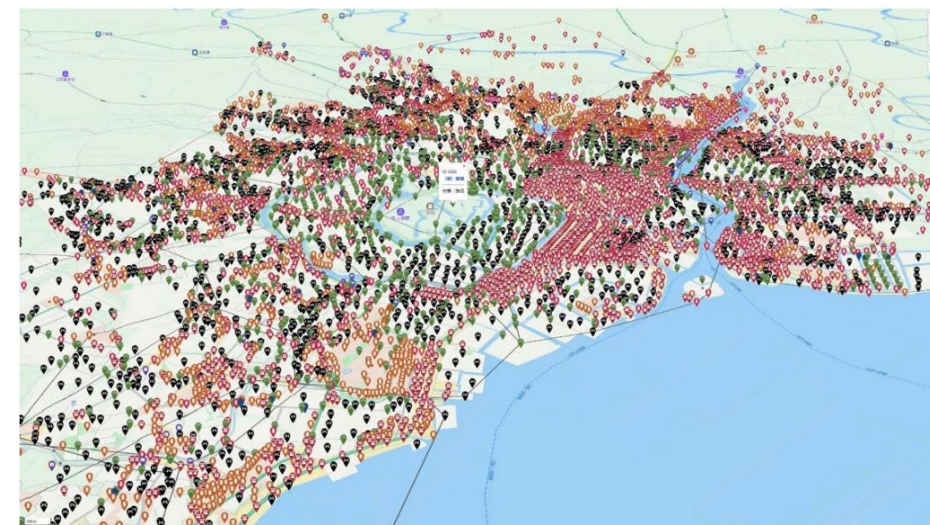
藩・近世村データセットの可視化例

公開データセット一覧（令和7年度）

- 「藩IDデータセット」（408藩を網羅、2025年9月公開）
- 「国・地域IDデータセット」（旧国の識別子を改善）
- 「幕末期近世村領域データセット」（領分を可視化）
- 「江戸近世村統合データセット」（地名大系と統合）
- 「武鑑全集」「江戸マップ」の上屋敷・菩提寺情報とのリンク活用



幕末期近世村領域データセット
(加賀藩・藩ID=163の領分表示例)



「江戸マップ」俯瞰図

5. 江戸街道データセット／6. 国際標準の調査・スキーマ検討

令和6年度

- 五街道と主要脇街道をカバーする日本全国の主要街道データセット（6,400km分）を構築し公開。民間企業（株式会社MIERUNE）の歴史地図サイト「れきちず」に活用された。
- 標準化が遅れている地名のメタデータスキーマやオントロジー分野について、現状に関する文献調査を実施。

令和7年度

- 新たな街道を追加し、総距離を7,700kmへと延伸したバージョン2を2025年6月に公開。街道・宿場ナンバリングを試作。
- 交通網研究を水上交通へ拡大するための基礎データとして「江戸末期湖沼データセット」を構築したほか、江戸切絵図の地名位置を改善したデータセットを公開。「れきちず」との協働も継続・発展。
- 文献調査やセミナーを通じて理解を深めるとともに、歴史学と3Dをテーマとした「第2回ヒストリーテック勉強会」を開催。

1. 機関連携とユースケース／2. 国際標準への対応

令和6年度

- 2025年1月24日、協力機関の東北大学と第1回研究実践ハブ研究会を開催し、「外邦図アーカイブからの地名抽出・マッピング支援」「過去の住所のジオコーダー開発」「センシティブな地名の公開ガイドライン」の3テーマを特定。2月25日には外邦図担当者とオンラインで意見交換を行い課題を把握。
- 相互運用性の向上を目的として、グローバルな地名基盤World Historical GazetteerやPelagiosネットワーク等と意見交換・基礎調査を実施。

令和7年度

- 2025年7月に東北大学と第2回研究実践ハブ研究会を開催し、連携を継続。
- Linked Pastsのオンライン会議等を通じて、World Historical GazetteerやPelagiosネットワークの最新の活動状況に関する情報収集を継続。

3. データ規格のモデルガイドラインの構築（DiHuCo-GEOガイドライン）

令和6年度

- 文献調査および独自のGeoNLP地名語辞書形式などの活用を検討した。

令和7年度

- 研究実践の知識をガイドライン内で集約する仕組みとして、「DiHuCo-GEOガイドライン」の構築に着手。
- 詳細な3ステップの進め方は次スライドの通り。

DiHuCo-GEOガイドライン構築の3ステップ

「DiHuCo-GEOガイドライン」構築ワークフロー

1

ワークフロー構築

CODHセミナー等の講演音声から、生成AI（Claude）を用いて構造化マークダウン記事（ユースケース、ベストプラクティス、課題の3類型）を自動生成するパイプラインを確立し、ガイドとして文書化。

2

試作版サイトの運用

静的サイトジェネレータHugoを用いた試作版サイトを構築し、計5件のセミナー等に由来する18本のAI生成記事を投入して見え方や信頼性の課題を検証。

3

本格システムの設計

試作を基に、本格システムに関する設計文書の整備を完了。

研究実践ハブ：DiHuCo-GEOガイドライン試作版

DiHuCo-GEOガイドライン（試作版サイト） ※近日中に公開予定



DiHuCo-GEOガイドラインは、人文情報学における地図／地名／地誌データの活用に向けたユースケースやベストプラクティスを提供し、それらを取りまとめたガイドラインを公表することを目指しています。

[ガイドラインについて](#)

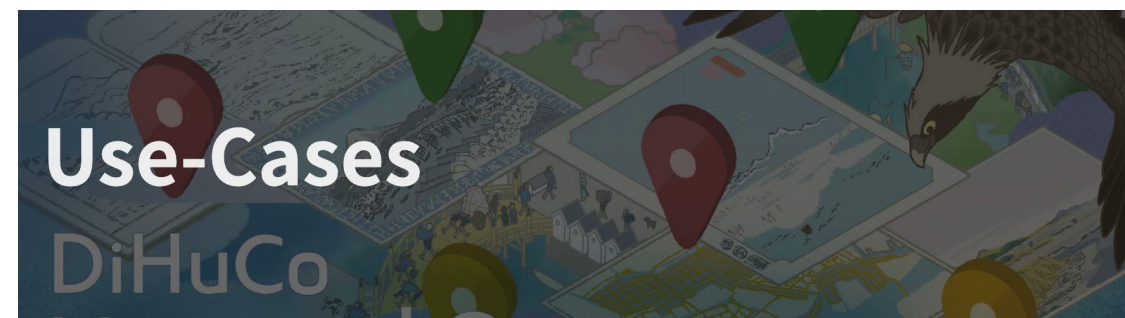
ガイドラインの作成方法や生成AIの活用など、ガイドラインに関する基本的な情報を提供します。

[ユースケース／ベストプラクティス](#)

ガイドラインの元となるユースケースやベストプラクティスをまとめます。人文情報学分野の実際の研究例を自分の研究に活用できるようなツールを提供します。

[タグ](#)

記事をテーマ別に分類したタグ一覧です。関心のあるトピックから関連記事を探すことができます。



[IIIF Curation Platform：ベストプラクティス](#)

デジタルアーカイブの画像キュレーション基盤として活用されるIIIF Curation Platformについて、複数の実践事例から共通パターンを抽出し、効果的な利用手法と推奨アプローチをまとめたベストプラクティスです。

関連記事:

[IIIF Curation Platform \(ICP\)：デジタルアーカイブの画像キュレーションを効率化する実用ガイド](#) [IIIF デジタルアーカイブ キュレーション](#)

[IIIF Curation Platform \(ICP\)：人文学資料のマイクロコンテンツ化ツール](#) [IIIF デジタルヒューマニティーズ キュレーション](#)

[IIIF Curation Platform \(ICP\)：利用者主導の画像キュレーション基盤](#) [IIIF デジタルアーカイブ キュレーション](#)

[詳細を見る →](#)

[メモリーグラフ：ベストプラクティス](#)

同一構図撮影支援アプリ「メモリーグラフ」の実践事例から、効果的な運用体制、利用場面、技術的工夫、継続性確保の共通パターンを抽出したベストプラクティス。学術調査から観光、教育、防災まで多様な分野での応用可能性を示す。

関連記事:

[メモリーグラフ：景観変化を記録・共有する同一構図撮影支援アプリ](#) [メモリーグラフ 災害アーカイブ 景観記録](#)

4. IIIF・写真アプリ等／c. 検討会実施・普及啓発

令和6年度

- 各種歴史地理データ、地名データの基礎構築を優先。
- 東北大学との研究会や、地理情報のデファクト標準形式（GeoJSON）に従ったデータ構築・公開を主軸として実施。

令和7年度

- 「IIIF Curation Viewer」に位置・日付表示機能を追加し華北交通アーカイブの古写真地図表示を可能とした。
- 写真アプリ「メモリーグラフ」を改良しユースケース共有のセミナーを開催。
- 明治末期の住所を緯度経度変換できる「jageocoder-dbtool」および「旧東京市15区住所データセット」を公開し、「関東大震災被災者マップ」を構築（新聞複数紙に報道）。
- 作成したデータセットの情報をCODH内のウェブページに集約。第24回CODHセミナー（カメラアプリによるフィールドワーク、参加80名）、第25回CODHセミナー（古写真と都市景観、参加24名）を開催。
- 「ジオ展2025」にヒストリーテック・ラボとして出展。

3-4 人材育成ハブ

人間文化研究機構（中核機関）

大学等の教育機関で活用可能な体系的教育プログラムの策定、およびDH人材育成のための国内外でのDHワークショップの開催や教育動画作成を通じた人材育成の基盤構築を担当した。

a. DH人材育成のための教育プログラム開発検討

令和6年度

- 千葉大学とともに、教育プログラムの開発における課題整理およびハブ運営の体制整備に着手。

令和7年度

- 「DH推進室」が中心となり、千葉大学とも連携しながら、計4回の検討会（2025年6月9日、10月14日、11月4日、2026年2月24日）等において協議を重ねて「教育プログラム」のたたき台を作成。
- 人材育成部会（2025年10月31日、2026年3月4日開催）での審議を経てブラッシュアップを行い、最終的に2026年3月のコンソーシアム全体会に諮った上で、人材育成プログラムモデル（案）を取りまとめた。

人材育成ハブ：教育プログラムモデル

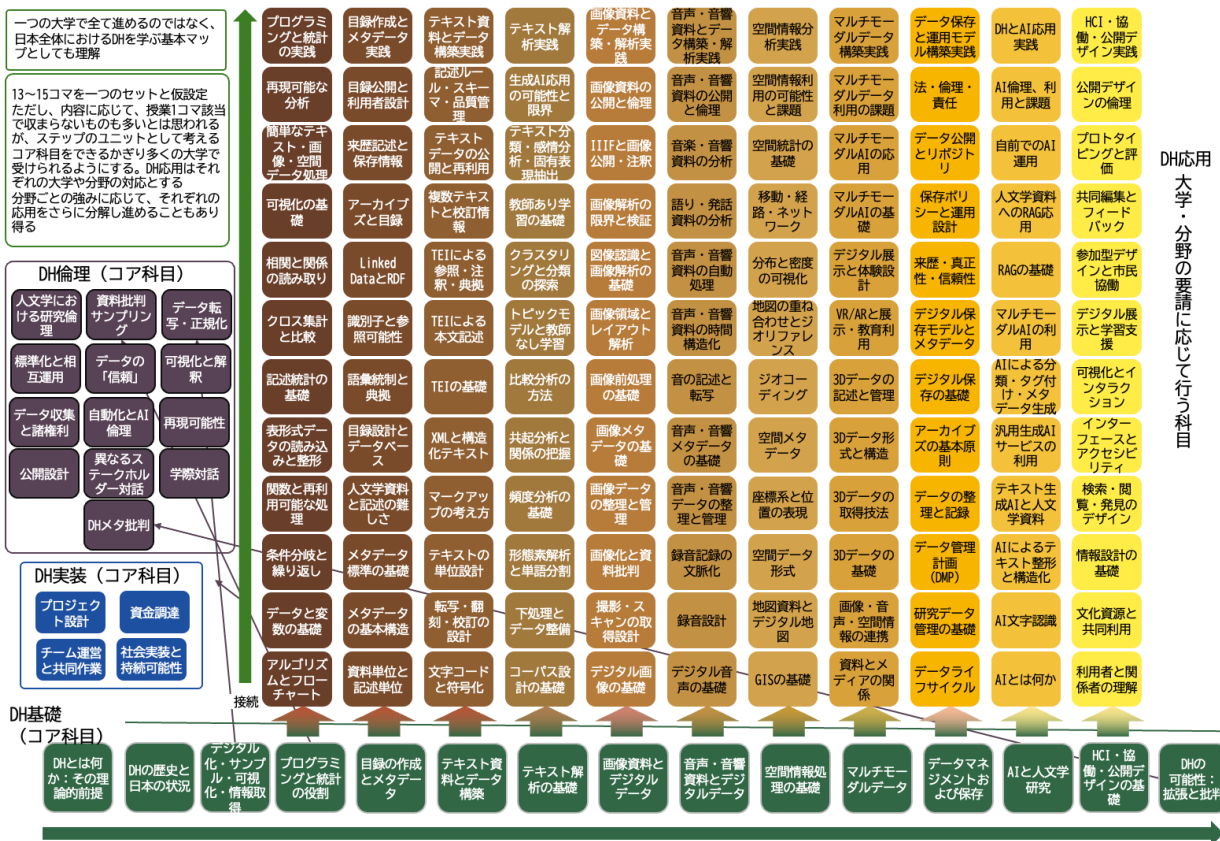
人材育成プログラムモデル（案）

プログラムはDHの倫理・基礎・実装の3分野となるコア科目と、基礎科目からより専門的な内容に拡張される応用科目で構成されている。

人材育成プログラムモデル（案） ver. 2.1

20260514 人材育成部会

人文学各分野課題への接続



学習者にとって

学ぶべき科目と全体のつながりが一目でわかり、体系的な学習計画を立てられる

大学にとって

学内の他部門と連携する際の具体的な材料として活用可能。

社会的意義

日本におけるDH研究の全体像を可視化する役割を果たす。

b. ワークショップ開催／c. オンデマンド動画作成

令和6年度

- 2025年2月3～5日、対面によるTEIワークショップを試行開催（5名参加）。
- ワークショップの解説内容を基に、記録動画を3本作成。

令和7年度

- 2025年8月25～27日、大阪大学の協力を得て、研究資料をデジタル環境で公開・管理するツールを学ぶワークショップ「デジタルヒューマニティーズのためのアーカイブ基盤を学ぶーOmekaとIIIFで研究資料を公開する」を開催。（28名参加）
- EAJRS 2025のプレイベントとして2025年9月9日にドイツのハイデルベルク大学にてTEIセミナー・ワークショップを開催。（39名参加）
- 大阪大学等でのワークショップの記録動画4本をオンデマンド形式に編集し、権利確認を経てコンソーシアム参画組織へ暫定公開。
- 令和8年度は、開発した教育プログラムに基づく動画作成を本格化。基礎科目の14科目を想定。

人材育成ハブ：ワークショップ

2025年8月開催ワークショップの様子



d. プログラム構築のための基礎調査

令和6年度

- 2025年3月上旬に渡英し、ロンドン・キングスカレッジの関係者にインタビュー調査を実施。
- 学部・大学院における教育の現状や人材育成の課題についての知見を獲得。

令和7年度

- 日本国内の大学におけるDH関連のシラバスを網羅的に調査・分析。この成果は、「じんもんこん2025」のポスターセッションにおいて発表を行い、国内の研究コミュニティから教育プログラムの高度化に向けた意見収集を実施。
- 2026年3月にスイスのチューリッヒ大学およびベルン大学を訪問し、現地のDH教育プログラムの運用状況を調査。同時に、人材育成ハブで作成した教育プログラムモデル（案）を提示して現地専門家からの意見聴取を行った。
- チューリッヒ大学およびベルン大学における調査の成果は、報告書としてまとめ2026年5月に公開。

4 総括と令和8年度に向けた展望

- コンソーシアムは目標15機関に対し23組織（2026年7月現在）へと拡大（153%）。運営委員会・部会・連絡会を通じた恒常的な連携体制を確立。
- TEIおよび地理空間の両分野で国際標準準拠のガイドラインを公開し、株式会社MIERUNE・九州大学等での具体的な実装・活用に向けての検討が進行中。
- EAJRSとのMOU締結を皮切りに、ドイツ・英国・スイス等での国際発信とネットワーク構築を推進。
- 人材育成プログラムモデル（案）を策定し、オンデマンド動画・ワークショップを通じた基盤整備が進捗。

令和8年度に向けた主な計画

- コンソーシアムのさらなる拡充と、日本全体のDX推進を担う連携体制の強化
- 教育プログラムに基づくオンデマンド動画の本格作成（基礎科目14本）
- 東アジア・日本語テキストデータ構造化ガイドラインのユースケース開発と全国展開による、人文DXの基盤構築。
- DiHuCo-GEOガイドラインの本格システム構築